２０１９年度がんサバイバーシップ研究助成金

研　究　報　告　書
（年　間）

２０２０年　８月３０日

公益財団法人　がん研究振興財団

理事長　　堀　田　知　光　　殿

研究施設 名古屋市立大学病院

住　　所　名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄１

研究者氏名　内田　恵　印

（研究課題）

がん治療後も残存する倦怠感と精神心理的苦痛を軽減するためのウェブツールの開発

２０１９年　８月　５日付助成金交付のあった標記研究課題について研究が終了致しましたのでご報告いたします。

【研究目的】

本研究の目的は、神経心理症状群をターゲットとした女性がんサバイバーの治療後に残存する倦怠感を軽減するためのウェブツールを作成し、無作為化比較試験でその効果を検討することである。

【研究内容】

1. がんサバイバーの治療後も残存する倦怠感を軽減するためのウェブツールの開発

先行研究よりがんサバイバーは治療後も残存する副作用に関する情報提供やセルフケアを求めていることが示唆されたため、この領域に焦点を絞ったウェブツールを開発する。

2. 開発したウェブツールによる介入の有用性を検討する無作為化比較試験

【対象】化学療法・放射線療法のいずれかを終了してから半年以内のがんサバイバー

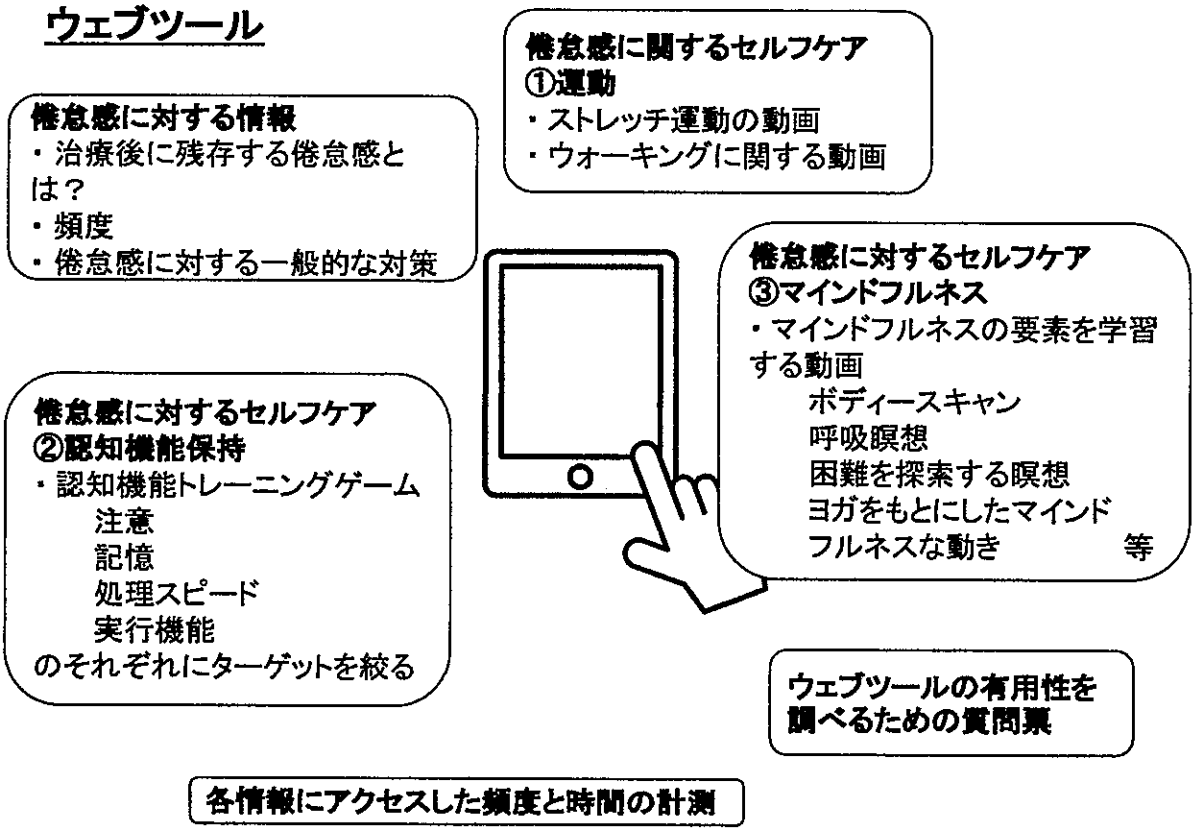
【研究デザイン】自己記入式質問票を用いた縦断研究（介入の直前・１月後・３月後）

【調査項目】Hospital Anxiety and Depression Scale(不安・抑うつ)、M.D. Anderson Symptom Inventory(身体症状)、Functional Assessment of Cancer Therapy Breast(QOL)、Short-form Supportive Care Needs Survey questionnaire(ニード)、Cancer Fatigue Scale（倦怠感)、Stroop test・Trail making test B・数唱＜逆唱＞（実行機能の評価）、主観的な認知機能障害の有無、１週間の平均ウォーキング時間、ウェブツールの満足度、医学的社会的背景

【必要症例数】χ 二乗検定において、中等度以上の倦怠感が残る割合を介入群で35%、対照群で50%と仮定し、α 値(両側)を0.05, β 値を0.2 とすると約180 である。

【解析方法】χ 二乗検定にて介入群と対照群において、中等度以上の倦怠感が残っている人、うつ病・適応障害の人、中等度以上の睡眠障害が残っている人、中等度以上の痛みが残っている人の比率に差があるのかを解析する。介入群と対照群における実行機能とQOLの差は３つの認知機能尺度とFACT-B の平均点の差があるかどうかをｔ検定で検討する。統計解析はSPSS を使用する。

【研究の結果】ウェブツールの内、ストレッチ運動の動画、ウォーキングに関する動画、マインドフルネスの要素を学習する動画、倦怠感に関する情報提供のペー

ジ、ウェブツールの有用性を調べるための質問票の自動メール送信システム、各情報にアクセスした頻度と時間を継続するシステムについては完成した。

今後、注意・記憶・処理スピード・実行機能のそれぞれにターゲットを絞った認知機能トレーニングゲームを作成し、完成したウェブツールを用いて無作為化比較試験を行う予定である。